

A市内の高校生のヤングケアラーの実態調査

—A市の特徴と高校生対象の調査に生じる課題—

○ 北九州市立大学 寺田 千栄子 (008652)

深谷 裕 (北九州市立大学・005587)

キーワード3つ: ヤングケアラー、実態調査、高校生

1. 研究目的

「子ども・子育て支援法の一部を改正する法律」の改正（2024年）において、ヤングケアラーは「家族の介護その他の日常的世話を過度に行なっていると認められる子ども」と定義された。また、日常的な支援につなげていくために、学校等でのアンケートを通じた実態把握が必要であるとされている。

これに先立ち、筆者らは2023年10月にA市のヤングケアラーの（と思われる）子どもの実態把握を行うことを目的に、市内高等学校8校を対象とする調査を実施した。本研究では、A市の高校生のヤングケアラーの特徴と同時に、学校等で行うヤングケアラー調査の課題を明確にすることを通じ、実態把握調査の基礎的資料に資することを目的とする。

2. 研究の視点および方法

市内の高校生を対象に、調査票を用いた実態調査を行った。調査票は、先行研究から得られている結果と比較分析しA市にみられる傾向を将来的に明らかにできるように、調査項目は先述の2020年～2021年に実施された全国調査¹⁾及び埼玉県²⁾の調査²⁾で用いられた項目に沿って作成した。調査対象は市内の8校(全日制高校7、単位制1校)に協力を依頼し、HR等の時間を利用し在籍する生徒1～3年生に回答してもらった。QRコードから質問票にアクセスする仕組みにした。調査期間は2023年10月末～11月末の約1か月間である。

3. 倫理的配慮

本研究は「北九州市立大学人を対象とする研究に関するガイドライン」に則り実施した。調査票には、調査で得たデータの活用方法、回答は統計的に処理され個人が特定されるような形で公表されることは無いことを明記した。また、回答をもって本調査に同意を得たこととした。本研究について、開示すべき利益相反はない。

4. 研究結果

1年生984名(36.0%)、2年生(31.8%)、3年生878名(32.1%)の計2,731名から回答を得た。そのうち「家族の中にケアをしている人がいる」者は127名(4.7%)であった。ケアの対象者は「母親や父親」(23.6%)、「祖父母」(14.9%)、「きょうだい」(36.2%)、「それ以外」(4.7%)、「無回答」(41.7%)であった。親のケアをしている場合、親の「身体障害」や「精神疾患」が挙げられており、祖父母をケアしている場合は「高齢」という理由が、また弟や妹をケアしている場合は「幼い」という理由が多く挙げられた。また、母親のケ

アをしている理由について「わからない」(40%)との回答が多く確認された。1日のケア時間と頻度との関係性を見ると、3名はほぼ毎日7時間以上のケアをしていることが明らかになった。本人たちの認識について、「特にキツさは感じていない」(47.2%)、「やりがいを感じている」(40.9%)との回答が多く、ケアについて相談をしたことがない人(89.0%)が多かった。

5. 考察

(1) 全国調査と比較したA市の特徴

調査で得られたA市のヤングケアラーの傾向を精査すると、全国同様の傾向が確認された。一方で、全国調査の結果とは若干異なる特徴も浮かび上がった(図1)。また、実際相談に至った学生は全国調査少ない傾向にあるが、相談に至らないものでも一定のニーズがあることが示された。加えて、相談相手としては「家族」「友人」「学校教員」「SNS」などが身近な者が選ばれる傾向にあり、相談援助専門職への相談は少ない。このことから、一次相談の充実やSNSの活用など現代の子どものニーズに応じた相談方法の多様化、アウトリーチの必要性が示唆された。

(2) 本調査から見る調査の課題

本調査は対象校で全数を対象としたこともあり、居住地(海外を記載)や家族構成(ペットを記載)などの項目において、正確な状況がわからない回答が多く散見された。また、全国調査では定時制にヤングケアラーが多く存在することを鑑みると、学校種別を加味した調査の実施が求められる。

ヤングケアラー追跡項目についても、ケアの対象を尋ねる項目における「無回答」(41.7%)や、ケアの理由を尋ねる項目における「わからない」(母親40%)など具体的な状況を得難い回答が見られた。前者は回答者が「答えたくない」など意図的に回答している可能性も拭いきれないが、後者は本人も自覚できていない可能性などが推測された。子どもに分かりやすい表現で実施することや、回答者の心情に十分配慮することなど工夫が必要である。また、回答することを通じて、回答者が自らの権利や相談でき得る社会資源に気づくような仕組みをとることで、副次的な効果も期待できると考えられた。

- 1) 三菱UFJリサーチ&コンサルティング(2021)「ヤングケアラーの実態に関する調査研究」(令和2年度子ども・子育て支援推進調査研究事業)
- 2) 埼玉県(2020)「埼玉県ヤングケアラー支援計画のためのヤングケアラー実態調査結果」

図1 全国調査と異なるA市の特徴

- ① 祖父母の世話において、全国調査に見られる「見守り」ではなく「家事」を担っている者が多い。
- ② きょうだいの世話をしている理由として、全国調査に見られる「知的障がい」や「身体障がい」の回答は確認されていない。
- ③ 世話を一緒に行っている人が「いない」者が全国調査に比べ多い。
- ④ やりたいけれどできていないことは「特にない」という回答が全国調査よりも多く、やりたいことが「できていない」(複数項目)と感じている回答者の割合は少ない。
- ⑤ 世話について相談したことがある者が全国調査より少ない。
- ⑥ 希望する支援については、全国調査同様に「特にない」と回答したものが多く、具体的な支援の希望に関しても必要性を感じている回答者の割合が少ない。